



研究テーマ

- 1 皮膚がんに関する講演会と皮膚がん検診
- 2 皮膚病変を有するATLLの皮膚浸潤の遺伝子解析と臨床病型及び予後との関連
- 3 アトピー性皮膚炎の発症メカニズムの解明

研究概要

皮膚科は県内全域から重症薬疹、熱傷、皮膚がんなど重症患者さんが紹介されます。皮膚科は小児から高齢者まで、また内科系(アトピー性皮膚炎など)から外科系疾患(皮膚がんなど)まで幅広い患者さんを診療する科です。宮崎県は日照時間も長く、紫外線の強い地域のため、紫外線による皮膚がんの患者さんも多く、以前から皮膚がんの診療や研究を続けています。特に南九州に多い成人T細胞白血病/リンパ腫(ATLL)はウイルス(HTLV-1)が原因で、発症すると約半数に皮膚浸潤が生じ皮膚科医がまず診断する機会が多く、皮膚浸潤をとまなうATLLは予後不良です。当科では免疫学教室と連携し、アトピー性皮膚炎の発症メカニズムの解明も行っています。

天野 正宏

あまの まさひろ

医学部

医学科

感覚運動医学講座皮膚科学分野

教授

キーワード

皮膚科学
皮膚がん
HTLV-1
ATLL
遺伝子変異
アトピー性皮膚炎
樹状細胞

特許情報・
共同研究・
応用分野など

医学部腫瘍生化学分野
医学部免疫学分野

1 皮膚がんに関する講演会と皮膚がん検診

宮崎県清武町において1994～2008年の15年間に延べ16,352人の検診をおこなった。清武町住民(原則、40歳以上)を対象として、延べ17日間/年、皮膚科専門医が視診(露光部)をおこなない、皮膚がんは大学へ紹介し、上皮内癌である日光角化症に関しては冷凍凝固治療などを施行した。15年間に日光角化症 95例、基底細胞癌 12例、悪性黒色腫 3例、有棘細胞癌 2例、エクリン汗孔癌 1例、ボーエン病 1例を確認した。日光角化症では、女性よりも男性に多く、またスキントップではI型に、職業別では屋外作業者に多く認められた。その後も宮崎県内の皮膚科専門医の不在の地域に出向き、皮膚がんに関する講演会と、無料の皮膚がん検診を年1回継続している。

2 皮膚病変を有するATLLの皮膚浸潤の遺伝子解析と臨床病型及び予後との関連

宮崎県はHTLV-1キャリアの多い地域であり、皮膚科外来にも多数、ATLL患者さんが紹介されてきます。ATLLはその半分の症例で皮膚病変があることから、ATLL特異疹と予後を解明することは当科のテーマです。現在進行中の研究テーマは、「皮膚病変を有するATLLの皮膚浸潤の遺伝子解析と、臨床病型及び予後との関連」です。特に、「皮膚病変を有するくすぶり型ATLL」について、遺伝子異常と予後因子の解析を進めています。皮膚病変を有する、「くすぶり型ATLL」の急性転化までの期間と遺伝子異常の関連を解明することは、単純にskin directed therapyを行う群と、早急な移植や多剤併用化学療法の準備を行う群に分けることができるからです。具体的には、生検したATLL特異疹の皮膚病変のターゲットシーケンス解析を行い、予後因子としての候補の探索的な研究を行っております。

3 アトピー性皮膚炎の発症メカニズムの解明

アトピー性皮膚炎は増悪・寛解を繰り返す瘙痒のある湿疹を主病変とするアレルギー性皮膚疾患であり、免疫系とともに表皮バリア機能因子と環境因子の相互作用の異常が上皮恒常性維持の破綻を導くと考えられている。しかしながら、上皮組織恒常性維持の破綻に基づくアレルギー性皮膚炎症慢性化病態の成立における免疫制御機構については明らかにされていない。医学部免疫学教室において、アトピー性皮膚炎の病態増悪機構における真皮樹状細胞の役割について、恒常的真皮樹状細胞欠損マウスを用いて、MC903 (calcipotriol; Dovonex)誘発アトピー性皮膚炎モデルにおいて解明している。

ホームページ

<http://www.med.miyazaki-u.ac.jp/home/derma/>

技術相談に応じられる関連分野

がん関連、アレルギー疾患

メッセージ

今後、人口の高齢化に伴い皮膚がんは増加傾向にあります。また最近、アレルギー疾患が増加しており、その増加・増悪の要因として環境要因の変化が挙げられています。当科では実臨床に即した臨床研究を行っています。